

ている。年表の解説の形で幕末には宇和島の医学史との接点を書き入れてある。

その他、宇和島藩の表題であるが、文化交流の多かった近隣の大洲藩、吉田藩の医師についても言及している。また時代的に幕末に止まらず明治初期の宇和島藩の医療事情を述べ、日本の医学が漢方医学→蘭方医学→ドイツ医学へと接続する経過を郷土史的に明らかにした。明治期に日本医学会で活躍した八島星海、谷口長雄について記述した。

執筆者の清水英先生は多忙な内科開業医を続けながら、資料の整理、編集、校正等を殆んど一人で仕上げられたばかりでなく、特に藩医の墓石調査の為、宇和四郡の数十戸の寺をめぐり、今まで所在不明の六名の墓所を発見するなど、本書の完成までに傾注された努力は、全く敬服のほかほかはない。

(宇和島市医師会 萩山 正治)

(本書を)希望の方は宇和島市医師会宛に直接申し込んで下されば、定価千円(消費税なし)で購入出来ます。残四百部、四六判、二四六頁、平成十年七月刊)

松木明知 編著

『中川五郎治書誌』

わが国への牛痘接種法の伝来には、松前地方に移入された北方系と、長崎に移植された南方系の二系統があることはよく知られている。北方系種痘をつたえたのが中川五郎治であり、それは南方系に先立つこと二五年ほど早い時期であった。

その中川五郎治について、著者は医学部の学生時代から研究に取り組みはじめ、その方面の研究の第一人者であった阿部龍夫氏から関連資料を恵与されるとともに、数々の教示と激励をうけながら、以来三十七年にわたって鋭意研究をつづけて、おおくの新知見をえている。この間に自らが収集した五郎治に関する基本的史料をはじめ、他のおおくの著者たちの論文をまとめたのが本書である。

著者は先年「中川五郎治研究文献目録」と題して『北海道医事文化史料集成』上巻に、七四篇の論考をまとめて収録した。そのさい「編者未見の文献も、これ以外に少なくないかと思われるが、後日の完璧を期して一応未定稿としておく」と後日の完成に望みを託していた。その後の研究においてさらにおおくの史料を収集することに成功し、念願がかなって今回のこの編著には阿部龍夫氏をはじめとする七二名と、北海道医師会など五機関の手による一三八篇の論文が収録されている。これによって著者がいう「中川五郎治に興味を持った人がさらなる研究を行うため、資料や研究文献を求める際の便を企てるためである」(はじめに)という目的は十分はたされるものと思う。今後は本書を参考にしない中川五郎治の研究はありえない。

本書の構成をみれば理解できるように、これは五郎治の単なる文献集ではない。著者名、書名あるいは論文名、発表誌名あるいは発行所名をあげるだけでなく、ほんの二、三行ではあっても、かならず適切な評価が書きくわえられている。

これは著者が一つ、一つの論文をいかに大切に扱い、文章のすみずみまで眼をとおしている証左といえよう。われわれはこれによって、どの論文が読むに値するかを知ることができるのである。

一三八篇の論考はまず著者名の五十音順に配列され、同一著者の論文は発表年次順に整然とおかれている。この一三八篇のうち、著者自身の三九篇をふくむ五三篇は、全文が収録されている。著者の三九篇全編の全文が収録されているので、書名からは判然とうけとすることはできないが、本書は五郎治についての論文集といつてよい。その点を一層アピールしてもよかつたのではなからうか。発表年次順におさめられている論文から、著者の研究の推移をたどることが出来るといふ利便さもくわわる。

書名に書誌という文字がふくまれているが、この点については著者も「所謂文学領域などの書誌と違って、著書などの装幀に関しては一切言及していない」とあらかじめ読者の諒解を取りつけている。それはそれで正しい態度といえようが、論文の初出の記載が首尾一貫していないのは残念なことといわなければならない。ほとんどの論文においてはその初出と再録された単行本が、明確に表記されているが、なかには一方が欠けてしまっているのも見うけられる。一例をあげれば、一二〇頁所収の論文では、初出が『蘭学資料研究会研究報告』であり、それが『北海道の医史』に再録された旨がしるされているが、七九頁所収の論文は、初出雑誌である『日本医事

新報』の名しかあげられていない。しかしこの論文のちに『津軽の医史』に再録されているので、われわれとしては保存も、アクセスも『津軽の医史』の方がより容易であろう。

さらに二三〇頁や二三三頁所収の論文のように、初出は『蘭学資料研究会研究報告』でありながらそれにはふれずに、再録箇所のみが表記されている記述もみられる。また再録にあたって題名に変更がくわえられているにもかかわらず、そのような注記がされていないことがま見られる。論文の題名だけをみるかぎり、これでは別論文と認識してしまう危険なしとしない。

明治期にそれまでの通説に敢然と戦いをいどんで、「抹殺博士」の綽名を奉られた歴史学者がいたが、著者もこの先人に負けずに、数々の先学の業績にたいして訂正を迫っている点に眼につく。後人によってその誤りを訂正されるのは、さきに行くものの宿命かもしれない。先人の業績にたいする礼をつくした加筆の筆は、学問の進歩のためにはぜひ必要な措置であろうと思う。その意味において著者は、「訂正博士」の名にふさわしい人物といえよう。

著者は一点一画をゆるがせにしない資質の持ち主にちがいない。「函館図書館本」は「市立函館図書館本」が正しく、「函書総目録」は「国書総目録」とすべきである、などのように、些細な点についても目配りをして加筆や訂正をもとめている。これは『科学医学資料研究』に発表された「馬場佐十郎訳『魯西亜牛痘全書』の刊行年について」(本書三二五―三三九頁に再録)において遺憾なく発揮されている。本論は杉本つと

む氏の著書『江戸の翻訳家』にみられる、馬場佐十郎があらわした『遁花秘訣』は、ジェンナーの原著の翻訳であるとする杉本氏の主張は明らかに事実誤認であるとして、筆勢鋭く斬りこんで訂正を求めている。わたくしも以前杉本氏のこの著書を読んだおり、誤った解釈であるとの認識をもったことがあるので、著者の主張は充分にうなずけるところである。

著者は多忙をきわめる臨床医学系の教授職にありながら、医史学の分野においてもおおくの論文を矢継ぎ早に発表している。新幹線の車中において、はたまた航空機の機内においても簡単に論文をまとめる才能の持ち主であると自らおべているので、寸時を惜しんで執筆活動に専念しているのであろう。時間を無駄にしないように、周到な準備をして機内の人になるにちがいないと想像している。

さきの第一〇〇回日本医史学会総会において、本書によって著者は一九九九年度の第一一回矢数医史学賞を受賞された。長年の努力の末に成稿をえた本書の刊行とともに、矢数医史学賞受賞にたいしても心からの祝福を申しあげて新刊紹介をおえたい。

(深瀬 泰旦)

〔松本明知：〒〇三六八五六二青森県弘前市在府町五 弘前大
学医学部麻酔科学教室 電話〇一七二二三一五一、一九九
八年一月二〇日発行、菊判、三五五頁〕

第四五巻三号への追加とおわび

左記の論文において、編集委員会の不手際により脱漏がありましたので追加いたします。著者の方々ならびに会員の皆様に、深くおわび申し上げます。

(一) 四〇六ページに掲載すべき写真①を、左記に追加、掲載いたします。

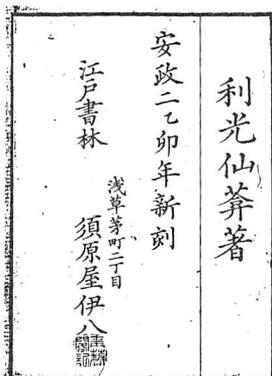


写真1 安政版『魯西亜牛痘全書』の奥付

(二) 五〇〇ページの英語論文の受付と受理について、左記のように追加いたします。

Received 10 Nov. 1998

Accepted 24 May 1999